

〔研究ノート〕新収蔵品紹介

富岡鉄斎「老子出関図」について

令和3年(2021)、当館は日本近代の文人画家・富岡鉄斎(1836~1924)に関連する二件の作品をご寄贈いただき、新たに当館の収蔵品として迎え入れることになりました。一件は絵画作品「老子出関図」(図1。明治38年【1905】、紙本墨画淡彩)、もう一件は鉄斎とその夫人である春子氏の書簡を合装した「富岡夫妻家書」(鉄斎書簡は同36年【1903】)です。本稿では、このうち「老子出関図」についてご紹介したいと思います。

本図は、春秋時代の思想家である老子が、周王朝の衰退をさと、牛に乗って函谷関を出て西へと去ったという「老子出関」の故事を描いたものであることが、鉄斎による箱書「太上老君出関図」からわかります。この故事は中国においては、老子が出関の際、関守の尹喜に請われて自らの言説(のちの「老子道德経」)を授けた場面を歴史画風に描く図(図2。商喜「老子出関図」明時代【15世紀】、MOA美術館蔵)、また騎牛の老子のみ(時に従者を伴う)を象徴的に表す図など、老荘思想そして道教の祖とされた老子にまつわる画題として人気を博しました。北宋(11世紀)の宣和内府には、五代の王商、支仲元、李昇などといった画家による「老子出関」テーマの作が所蔵され

ていたといひ(北宋『宣和画譜』巻第三より)、更に日本を始めとする東アジアでも、「老子出関図」などの老子の図様が数多く描かれました。

寄贈の「老子出関図」は、牛に乗った老子の後ろ姿をとらえています。老子は牛の手綱を手にして画面奥を見つめ、瓢箪を向かって左の角にくりつけた牛は、まるい目を鑑賞者に向けているようにもみえます。画面上方には、右から「持而盈之、／不如其已、／揣而銳之、／不可長保、／金玉滿堂、／莫之能守、／富貴而／驕、自／遣其／咎、功／成名遂／身退、／天之道。／老子。／鐵齋外史時年／七十」(斜線と句読点は筆者による)とあります。これは「老子」第九章からの引用で、「身を守るためには、適当な時機をみて身をひくのがよい」といった趣旨の言です。文末の鉄斎の款記から、本図は70歳のとき(明治38年【1905】)の作とわかります。また引首印に、江戸の池永一峰(1665~1737)による刻印「氷雪心」(朱文橢円印)、尾印に、円山大迂が鉄斎のため明治37年(1904)に刻した「富岡百鍊」(朱文方印)が捺されています。

膨大な漢籍を讀破し、日ごろから「老子」を愛読していたという鉄斎は、老子をテーマとした書画を少なからず残しています。主な絵画を年代順に表記すると、まず①40代の作「老子出関図」(図3。「淵明遊興図」と対幅。清荒神清澄寺鉄斎美術館蔵)では、聳え立つ山々を背景に、従者と歩む騎牛の老子

を描いています。②明治16年(1883)48歳の連作「漢土名賢画像」中の「老子図」(図4。同館蔵)は、騎牛の老子を表し、牛は向かって左の角に靈芝を括りつけています。そして③明治37年(1904)69歳の「老子出関図」(同館蔵)は騎牛の老子と従者の姿を表します。④明治40年(1907)72歳の「老聃度関図」(「陸羽煮茶図」と対幅。辰馬考古資料館蔵)は、聳え立つ山々と、牛車に乗る老子を表す山水図です。最晩年となる⑤大正12年(1923)88歳の「老子出関図」(清荒神清澄寺鉄斎美術館蔵)、そして⑥同13年(1924)89歳の「老子騎牛図」(図5。布施美術館蔵)も、同様に騎牛の老子と従者を表し、⑥は牛の角に靈芝を括っています。

以上の現存作例から、鉄斎が生涯にわたって老子、とみに老子出関のテーマを好んだことが窺えますが、特に最晩年の⑤と⑥は、当館蔵品と同様、「老子」第九章の文を書いています。老年を迎えた鉄斎にとって、この一文と「老子出関」の故事は、自身の理想の生き方をあらわす特別な一節だったのかもしれませんが。以上の作例と比較すると、当館蔵品は、騎牛の老子を単独で表す点、また老子を後ろ姿からとらえた図である点が特徴といえます。図様伝統からいえば、騎牛の老子のみを表すこと自体は決して珍しくありませんが、鉄斎の描く老子には、従者が付き添う

ことが多く、その従者は多くの場合、持物に瓢箪を携えた姿で描かれます。前述の②と⑥で、牛の角には靈芝が括られていましたが、それが本図では瓢箪にかわっており、牛が従者の役割をも兼ねているのです。これを、紙幅が小さく従者まで描くのが構図上難しかったため、老子出関の最重要モチーフである老子と牛のみを描いたと解することもできますが、一方で、つねに黄牛に乗り、その角に水瓶や鉢を括って市中を徘徊し「政黄牛」と呼ばれたという、北宋の惟政禪師のイメージを重ねた可能性もあります。

道釈人物画の作例で、動物に乗る姿を後ろからとらえ単独で描く図様としては、南宋(13世紀)の無準師範筆「郁山主図」(重要美術品、徳川美術館蔵)が知られますが、鉄斎はそうした過去の図様をふまえながら、鑑賞者に背をむける老子を描くことで、関を出て西へ去り、その後の消息は知れないと伝わる最期を、より味わい深く想起させようとしたのかもしれない。鉄斎の多彩な老子図の一作例として、今後多くの方々に本図を知っていただければと思います。(都甲さやか)

※挿図2は『道教の美術』展図録、大阪市立美術館、2009年。挿図3は、『鉄斎研究』5号、清荒神清澄寺鉄斎美術館、1971年。挿図4は、同65号、1983年。挿図5は、同42号、1979年より複写しました



図1



図2



図3



図4



図5

季刊 美のたより No.219

令和4年7月1日

発行 大和文華館